

「易行品」の提示する根本問題

— 阿惟越致成就の方法について —

本 多 弘 之

一

『十住論』の論主は、『十地経』を解釈するについて、数多くの経典を引用して、大乘の仏道における菩薩地の意義を説明しているのであるが、とりわけ不退転の確信を樹立するという求道者の根本問題に関わって、「浄土経典」の思想を取り込んでいる。特に、具体的な求道の問題として「惟越致」の菩薩が「疾く」不退を得ようとするならば、「信方便易行」の道があることを顕わしている。即ち多くの求道者の切実真摯な問いに対して、「易行品」を開くのである。

その易行とは諸仏の名を称することであると、先ず『宝月童子所問経』阿惟越致品によって十方十仏の称名を

出し、続いて無量寿経等に説かれる「阿弥陀仏の本願」を掲げ、阿弥陀仏の本願を憶念しその名号を称すれば「即ち必定に入つて阿耨多羅三藐三菩提を得る」ことができることを明らかにしている。すなわち仏道において不退転の確信を獲得するについて、論主は易行の要求を認め、そこに称名不退の道、就中、阿弥陀仏の称名不退の道を明らかにしたわけである。

易行の要求は「発菩提心」「調伏心品」を通して明らかにされた願心の深みにある。すなわち「発菩提心品」に発心の因縁について七つの場合を弁別して、その内の前の三については「必得成就」するも、残りの四については「根本微弱」の故に「必ずしも成ぜず」とし、善根淳熟したときのみ始めて不退を得るものであるといっている。この

問題を展開して「阿惟越致相品」を開いた論主は、惟越致の菩薩の根本問題が疑惑心にあることを指摘し、「一心信楽無所疑惑」のところに不退転不懈の阿惟越致が与えられることを述べている。これによって、『十住論』は一貫して菩提心の質を確かめ、不退の確信を明らかにして、自利利他を円満せんとするものであるけれども、その中心が菩提心にひそむ疑惑の問題であることが分るのである。しかし「易行品」において、仏名に随順するところに、疑惑なき純粹なる信順すなわち不退の確信が開かれるものであると主張される。しかれば論主の『十住論』解釈の眼目がこの信方便易行を説く「易行品」にあること、なかでも「弥陀章」を開いて、菩薩十地を歩みうる確信の最高の手がかりが「阿弥陀の本願を憶念する」ところにあるということは疑う余地がないようである。

しかし一通り論を読んだかぎりでは、「易行品」の説き方にしても、さらには「易行品」以後の諸品の説き方をみても、称名不退の確信というものが、積極的に仏道成立の不退転の地位を保持しうるのだという主張のようにはみえない、むしろそれがぼかされてしまっているというのが卒直な感じである。けれども確かに陸道・水道の二道の譬えによって、易行を水道の乗船に比して、「疾く」「此の身」

において阿惟越致を得んとするのならば、この易行を取らざるべからずと説いているのである。それならば「除業品」以降の論述がどういう位置乃至は役割を持ちうるかということについて、少くとも一考の余地はあると思われる。もし、易行道というものが、論主の『十地経』解釈の結論ともいうべきものであるならば、この論述の仕方はどうみてもあまり巧みな説示であるとはいえないのではないか。もし「易行」が結論でないならば、易行と「除業品」以下とはどういう関連をもっていると考えるべきであるのか。これは「易行品」以前の諸品の説き方とも密接に関係があるので、「易行品」を中心にして前後の問題を照応しつつ、論主の意図を探ってみたいと思う。

二

「易行品」開出の直接的手がかりは「阿惟越致相品」にある。しかしその由って来る源は、すでに「序品」以来一貫して流れている論主の経典解釈の態度にある。すでに信心の菩薩をいましめ、二乗地へ墮する危機を繰返し説いてこれを克服させようとし、そのために願心の中にある疑惑心を払拭することが肝要であると説かれている。しかしその問題を徹底していった易行を出したのは、鈍根なる衆

生にこそ、不退転の信を獲得せしめんとする自利利他の課題の故であるといえよう。しかし「積願品」にも、浄土の相を説いて仏名を聞いて必定に入るといふことを言い、自利利他の実現は実は仏の本願において成立するという論主の信念を述べてあるのであろう。そういう論主の意図の一つが「発菩提心品」にも出ている。この部分は「易行品」以降の問題とも密接に関係すると思われるのでここに少しく考えてみたい。

先に述べたように「発菩提心品」には発心の因縁について七つをあげ、始めの三は「必得成就、根本深故」といい、後の四は「是四心多不成、或有成者、根本微弱故」といっている。その第四番目について、論主は求道者たる菩薩に従って聞法し、信樂心を以て無上道心に発ち上るなら、必定にも入り、無生法忍をも得ることができると説いて、

善根成熟するが故に、必定に住せしむ。若し無生法忍(を得ば)是の諸菩薩、第七・第八・第九・第十地に在り。^④

という。そこでは一応、仏道の必定することを認めているのである。しかしこの第四発心は後の四つの因縁を代表するものであると考えられ、「必定」することが難かしい菩提心であるということができる。

これまでの釈において論主は、生如来家とか必定地とか不退転とかが、初地の歡喜心において獲得されることは語ってきているのであるが、「無生法忍」ということについては触れていなかった。ここにおいて無生法忍にふれて「十地経」の説相に従って、無生法忍は七地以上の菩薩の所得であることを確認している。確かに菩薩十地の経説においては、無生法忍が七地以上に現前すると言われている。^⑤ところがこの論では、この無生法忍を語る第四発心から後こそが、実は「根本微弱」であるとしてその菩提心が批判されるものであり、この十地経の経説に忠実なごとき無生法忍への願心さえも、「阿惟越致相品」で漸々転進の菩薩と指摘される努力意識の問題なのであり、さらには「易行品」で「行諸難行久乃可得」と語られ、退転の危機を克服することができない求道心と押えられるものなのである。すなわち、無生法忍は七地以上のいわゆる上地の菩薩の得るところであるけれども、それを高い境位の理想として努力しているかぎりには、退転の危機から離れられない。漸々精進の菩薩こそ、惟越致の菩薩であることを自認しなければならぬというのであろう。

一方、「阿惟越致相品」においては、阿惟越致の特徴として菩提心に「疑悔がない」ということを論主が強調してい

るのであるが、疑悔がないということをも明らかにするについて、「漸々精進後得阿惟越致」なる努力心の菩薩について解説して、五つの功德を出し、これを行わずれば直ちに阿惟越致に至るものであるといっている。その五功德の内容は、「不得我、不得衆生、不分別説法、不得菩提、不以相見仏」であるとし、要するに「無相の慧に通達するが故に疑悔あることなし」ということができるというのである。しかしして論主は、無有疑悔こそ不退転たるの必須条件であるとし、疑悔あるが故にこそ、漸々精進の菩薩が惟越致なのであると云っているのである。

そもそもこの阿惟越致なる課題は、実は『般若経』の提起する問題である。されば論主は、「般若に已に広く阿惟越致の相を説けり」と、その詳説は『般若経』に譲っているのである。その阿惟越致の無疑なる願心は、無生無滅の無相の智慧においてこそ確立されう。しかして初地にはすでにして、悪魔が仏身を似現して誘惑したぶらかすといえども、だまされることがないというような仏道への深い信頼があるという。初地に語られる歡喜とは、如来の家に生れ、如来の願心の中に生かされるような信頼であり、そこにこそ『般若経』に出される「阿惟越致」の相の成就があるのだというのである。

しかしして「易行品」に来るや、この不退の智慧を「怯弱下劣」なる我ら凡愚の上に具体化せんとする要求の前に説き出された聞名憶念の方法において、十方十仏の代表たる東方善徳仏の名の下に、その仏光に触れる衆生が無生法忍を得ることができると語られているのである。これに照らしてみると、易行道を水道の乗船に譬えているということの上には、さらに大きな意味を見出して置くことができる。『十地経』の第七地の経文には、無生法忍のことが語られるところに乗船の喩えが出されているのであるが、これを重頌で再説するところにおいて、

人の善く船に乗って大海中に入れば、深水を行くこと難しといえども、ために害せられざるがごとし。

といっている。しかして第八地に来ると、八地の菩薩の徳が無量無辺の意味をもち、七地以前の菩薩の徳はこれに比すれば百分の一にも及ばないと語られ、その得るところの智慧のはたらきについて、

譬えば人の船に乗りて大海を渡らんと欲するに、未だ大海に至らざれば多く功力を用う。海に入るや風を以てまた難礙なし。一日の行(行程)先の功力に過ぐ。

百千歳においても及ぶ能わざるところなり。菩薩もまた是の如し。多く善根を集むとも、大乘の船に乗ずれば

ば、菩薩所行の大智慧海に入りて功力を施さず。……
 功用の心なくして菩薩道に在り。^⑧

とその徳が語られている。無生無滅の法に如実に触れるところに、無功用にして無礙なる菩薩道が開かれるとするのである。

しかれば『十住論』の論主は、漸々転進の菩薩と阿惟越致の菩薩との差を、あたかも八地以上の菩薩と七地以下の菩薩の差に対応させているようである。というよりも、初地不退の徳こそは、実は任運に七地沈空の難をも越えて、無疑無慮に仏道に適用ことを確信させることができるものであるとし、その不退の信念を「信方便の易行」とりわけ阿弥陀仏の本願による称名憶念において与えようとしているのではなからうか。されば論主にとっては、阿惟越致こそは無相の智慧の現前であり、如来家の平常心であり、無生法忍のはたらきさえも、不退の信念において、ことさらに求めずして与えられるものであると言わんとするものはなからうか。^⑨

三

易行道の要求に対して論主は、そのような要求は仏道を求めんとするものの起すべき問いではないと叱り、「怯弱

下劣の言にして、大人志幹の説にあらざ」と決めつけ、その上で、「汝、もし必ず此の方便を聞かんとおもわば、今まさに之を説くべし」と易行を語り始めている。これは、漸々転進の努力心に立つ求道者を撰し、自力の不徹底なることを自覚せしめんがための叱責であろう。その意味であるたかも『観経』の韋提希に対する積尊の教示に対比されよう。切に極楽世界を樂う韋提希に対し「汝は是れ凡夫なり」、心想羸劣なることを信知せよとの教えは、仏の本願を聞信するためには、無くてはならない機の自覚への誘引の言葉である。劣器のための方便として説くのは、教の卑賤なることをいうのではなく、鈍根なる我らの機に潜む自力の執心の根を抜出せんがためである。真に仏力を信じて疑いがないということは、機の分別の無力なることと、存在そのものの有限無能なることを徹底的に信知することなしには成立しえない。水道の乗船は、陸路の險難を知ってこそその易行なるに落在しうるのである。

かくして「信方便易行」を漸やくに説き出した論主は、『宝月童子所問経』阿惟越致品によつて、十方十仏の聞名による不退を出してくるのである。^⑩

この十方十仏の中に「西方無量明仏」を出してはいるが、この仏は阿弥陀仏であるとはいえない。^⑪ されば、信方

便の易行を説くといつても、一般的に仏名を聞いて不退を得るといふこと、もしくは「一心に其の名号を称して即ち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得る」といふことをもつて、易行を説き出しているのである。そして、阿弥陀の本願を説き出すについては、十仏の名号で不退を得るといふことに、何らかの方法論的・論理的欠陥なり問題点なりがあつて論旨を展開するという形を取っているわけではない。一応この十仏で不退を得ることを明らかにした上で、「さらに余の仏、余の菩薩の名」によって不退を得る法があるかという問いを起し、

阿弥陀等仏 及諸大菩薩 称名一心念 亦得不退転^⑧。

と、初めて「阿弥陀」の名を出す。しかも「阿弥陀等の仏」と、諸仏の中の一仏という形で出してくる。そして、

是諸仏世尊現在十方清浄世界。皆称名憶念阿弥陀仏本願如^⑨是。若人念我称名自帰即入^⑩必定^⑪得^⑫阿耨多羅三藐三菩提^⑬。

と、何か徐やかな坂道を一步一步迂回して登っていくようにして阿弥陀仏の本願に到りつくのである。法然のような明晰な頭腦の持主にとってこの論が「傍明往生浄土之教」でしかなかった所以である。

しかして、阿弥陀の本願の内容を偈讚する中に、「若人

種善根、疑則華不開、信心清浄者、華開則見仏」とあつて、単に称名不退の一例として阿弥陀の名を出したのではなく、仏の名号に対する信心の問題が頭わになつて始めて、阿弥陀の本願というものが重要な意味を持つものであることが示される。阿惟越致は菩提心の内面に潜む疑悔の抉出によって獲得されうるものである。しかして、その易なる道として出されたる称名不退の教は、聞名の徳が本当に我らの上にはたらくために、我らの限りない疑惑心を払拭する如来願心のいわれが確信されてこなければならぬのである。「疑」の所在を修心と俱起せる内なる自力の努力心にあることを見通している論主は、第八地の風光にも匹敵するところの阿弥陀の名号による不退転の信念を、注意ぶかく遠慮を以て説いているようである。しかし、「乗彼八道船、能度難度海^⑭」というようなたらきを阿弥陀仏の讚頌に加えるところには、『華嚴經』の到達点ともいふべき第八地の「任運無功用」も、また『般若經』の無相の智慧たる無生法忍も、この本願に摂せられて聞名不退の益の中に与えられるものであるという論主の強い確信が表現されているものであるといふことができよう。

三

ところが、そのように不退転の獲得が易行道において達成され、無疑の信のところに菩薩の難関が克服されることを明らかにしながら、「除業品」第十に来ると、またまた、

問うていわく、但だ阿弥陀等の諸仏を憶念し、及び余の菩薩を念じて阿惟越致を得るのみなるや。さらに余の方便ありや。⁸⁶

という問いを越こすのである。この「余の方便」とは、先の「易行品」の場合と同じく、阿惟越致をうるための方法論についての問題である。しかしてこの章の名が「除業品」であるという点に留意するなら、前の「易行品」と並列しつつも、何か「易行品」の問題を掘り下げて阿惟越致の課題を徹底するところに、この問いの意味がありそうである。

『十住論』の当相をみれば、阿惟越致をうるについて、難行・易行があり、その易行とは広くは諸仏菩薩の名号を称名憶念することであり、別しては阿弥陀の本願を憶念しその名号を称することであった。難行とは、漸々転進の菩薩において端的に表わされるように諸の行業を積んで般若無相の智慧に通達していくことであろう。しかして、いま

仮りに「易行道」というものを伏せて「除業品」以下の論文の当相を見ていくならば、それは単なる聖道の菩薩初地の修行の解釈にすぎないものとなる。そういう眼で論の前半を見直せば、「易行品」開出の理由は芒洋として、何か異物が混入したに過ぎないようにも感じられてくるのである。

ここで我らは、『十住論』を読む眼目を改めて押え直しておかなければならない。この論は「序品」で既に明らかに、大乘菩薩道の与える願心の生命を発見させ、われらのこの愚かなる存在を真に貴い生命であるとして歓喜しうる不退転の確信を開こうとするものである。しかして「帰命相品」「五戒品」等でも明らかに、在家の菩薩をも撰して、菩提心をして無倦の仏道を退することなく歩ましめんとするものである。しかして、易行道の要求は単に上根に相対した意味の下根の機類に仮りに開いたものではない。漸々転進して七地に至ってぶつかるような深い疑惑心を、すでにして初地の発願のところに発掘して、それを克服せしめるものは易行のみであること、我らを越えて我らに先だってはたらく如来願力に聞く以外にないことを明らかにせんとしているのである。既にして易行道は、平

道の大道として現前に開示されてある。初地不退の確信が、易行によって与えられてある。阿惟越致への方法はここに直道として表わされていて、さらに迂余曲折を要求する必要はない。しかして問題は「疑則華不開」なる求道者の内に潜む疑悔のところに帰ってきているとすべきではないか。

「除業品」の内容は、「懺悔・勸請・隨喜・廻向」である。いわく、

阿惟越致を求むるは、但だ憶念、称名、礼敬するのみならず。また諸仏の所において懺悔、勸請、隨喜、廻向すべし。

と。論主は阿惟越致を求めるについて、惟越致の菩薩の中に、敗壞のものを誡め、漸々転進のものを索勵し、しかし機の自覚を徹底して易行道を開示した。しかしてここにおいて、その不退転の信こそが止まざる仏道への志願であることを示し、その信をして真に諸仏の名に相應する信念たらしめるために、諸仏の教えのもとに四種の法を行ずることを勧めるのである。特にこの四種の行の中で菩提心における疑いの問題と関係して重要なものは、懺悔と廻向であらう。

易行の称名不退に続いて懺悔を勧めるという次第を聞く

とき、直ちに思い起すものは、『無量寿經』智慧段の教説である。そこには「疑惑心を以て諸の功徳を修して彼の国に生れんと願ぜん」とあり、仏智を疑惑し、罪福を信じ、善本を修習して願生するものは、胎生の化土に生れて、五百年のあいだ仏を見ず、経法を聞かず、菩薩声聞衆を見ず云々ということがいわれ、「若し此の衆生、其の本罪を知りて深く自ら悔責して」初めて無量寿仏のもとに往詣することをうると語られている。疑惑の華中に埋没して、出ること忘れろという信の閉鎖性が、懺悔の心においてその突破口をようやく見出しうるというのである。求道者が願心に無倦なることをうるのは、真に信頼する無限なる慈悲の如来の前に、心から懺悔することによって信を本當に純化していくことができる。懺悔を通してこそ、正に敬礼すべきもの前に一切を投げ出して帰命することを得るというのが聞名不退の思想の意味であらう。けれども、聞名不退の教えについて、漸々精進の菩薩の根性、自力索勵して無相の智慧に相應せんとする努力意識が残存する限り、易行不退は「易往而無人」の空漠たる荒沢となる。不退はおろか、胎生段に示されるように、仏にも値えず、法をも聞くことのない独善の境に迷い入るのである。

懺悔を解釈しては、十方諸仏の前に「今世先世に作すと

ころの衆悪ごとごとく悔して余すことなかれ」と説き、
 「我れ、無始生死よりこのかた、起すところの罪業は、貪欲、瞋恚、愚癡のために逼まらるるが故なり。あるいは仏を誹らず、法を誹らず、僧を誹らず、あるいは罪福を誹らず、……」と、自己の罪を無始の三毒の所起として存在の根源から掘り起し、「今、此の罪をもって現在の諸仏・知者・見者・証者のみもとに尽く皆な発露して敢て覆蔵せず」と示して、懺悔の態度の真摯ならんことを教えている。親鸞は「化巻」に『往生礼讃』の雑修十三失のうち前の九失を引用するに続けて、同じ『礼讃』の三品の懺悔の文を引いているが、如何に一心に恭敬礼拝しているようでも、その根に自力雑修の心が残存する限り、この懺悔を徹底することはできない。懺悔が徹底していないならば、化土を出でることは永久にできない。「除業品」は除業という名の通り、阿惟越致の必須要件たる無疑の信樂を開くために、聞法するものが真向から一度はぶつかなければならない懺悔の課題を提起するのである。

仏道の祖師達は誰人たりとも深い存在の懺悔を表白しているのであるが、中でも浄土教の先達はその痛みが深い。たとえば善導大師の信仰表白の言葉が深い響きをもっているのも、自己の罪障の懺悔が全ての言葉の隅々にまで滲み

わたっているところからくるものであろう。発露懺悔なくして、純粹無漏の如来を仰ぐというようなことはないものであると思う。しかし親鸞はこれをさらに徹底して、三品の懺悔でさえも下根の我ら凡愚には、とても真向からは成就しがたいものであるとし、「真心徹到者即与上同」という『礼讃』の語によって、「真心徹到するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひとと、ひとしと宗師はのべたまふ」(善導和讃)と述べるのである。誠に我らは自己の罪業の深重なるをまかえりみず、ひたすら本願力に乗托するところにのみ、「念々称名常懺悔」のところに触れうるのであろう。

四

「除業品」の四法の第四番目に出されているのが、「廻向」である。不退を得ようとするについて、助業として廻向を説くのであろうが、『十住論』のこれ以後の論の展開は、実はこの廻向の課題の解明であるといえよう。ここに「積願品」に提起された問題、仏法僧を恭敬守護せんと願に始まり、衆生と共に仏道を成就せんとする願に具体化していく十大願の課題、一言でいえば自利利他の実践、それを「廻向」という言葉の下に阿惟越致を得るための方法

として取り上げてくるのである。廻向の課題は仏道の根底にある課題である。ここに『華嚴経』『般若経』等の大乘の仏道が成ずるか否かの大問題がある。これを論には、

云何為廻向。

我所有福德、一切皆和合。

為諸衆生三故、正廻向仏道。

と述べ、先の懺悔・勸請・随喜の行さえも、この廻向において正しく仏道へ方向するものとなることをいう。衆生の重さをもって自己の存在の重みとするところに、仏道が大乗たることをうる。しかして廻向こそは、衆生を摂して自己とし、自己の全存在を仏道に捧げんとする菩提心の必要条件である。しかも論主はこの廻向を積するについて、『般若経』の言葉を参照している。供養三宝の一切の功德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向しようという初地の経文の意を、『般若経』に照らして、不退の無疑の信念の糧とするためには、如何に廻向するといえどもその廻向の相に著してはならないというのである。

若し菩薩、此の廻向において取相貪著するは、是れを邪廻向と名づくるなり。

ともあり、

深心信解して実の如く廻向する、是を大廻向・具足廻

向と名づく。

ともいう。しかして「分別布施品」以降では法相の如く廻向するための実践を「布施行」を通して明らかにしている。布施の実践は、その浄なるか不浄なるかの弁別をくぐるとき、施者・受者ともに浄なるためには、捨身の行に帰するほかないことが明らかになる。財施・法施の別はあれども、また在家出家の立場はあれども、布施を如法に行ぜんとするならば、捨身の行を通して無相の智慧に立つほかない。

阿耨多羅三藐三菩提を退せずという阿惟越致の問題は「無上菩提に廻向する」という問題にまで煮つまってきた。無上道に廻向するということは、『華嚴経』においても、「十地品」の前にある「十廻向品」に明らかのように、求道心の潜らなければならぬ関門である。しかしこれを『般若経』に照らして解釈している論主の意図は、廻向の阿惟越致獲得に果す意味を、単に助業に止まるものではなく、般若の智慧の実践の成否がかかるようなものと主張しているようである。すなわち無相の智慧が廻向によって具体化されるとともに、その廻向が正しくなければ阿惟越致は成じえないと。されば、初地の行として「分別布施品」以降に布施行が説かれることは、正しく廻向の実践の展開

であり、さらには阿惟越致の眞の確立のための実践であることが了解されよう。苦悩の衆生の為にという利他行が、仏道に廻向せんとする自利の行と一つの問題になるところに廻向の実践がある。そこにおいて、廻向が眞にその廻向に執する立場を去った正廻向であるかどうか、また廻向心そのものが、純粹なる自利利他の実現となつているかどうかということが吟味せられなければならない。布施を波羅蜜の行として行うときに、その廻向心というものが眞実か否かが試練される。しかしてそこに自利と利他とを矛盾なく円満しうるか否かを通して、現前の阿惟越致の具体的なはたらきが確かめられる。しかるに、

発菩提心者、他利即自利。^⑤

ということが如何にして成立しうるか。在家のものは何はともあれ財施を実践せよ、出家のものは、すべからく法施を実行せよと勸励して、論主は「帰命相品」を開示する。ここに改めて、三宝に帰依するという求道者の基本的態度を取り上げるのである。

発心の菩薩、先ずまさに仏に帰依し、法に帰依し、僧に帰依すべし。三帰によって得るところの功德は、皆なまさに阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。^⑥

と述べてあつて、三宝に帰依するということも、実は廻向

の問題の展開たることを知ることができる。かくして、初地の実践のすべてが、廻向の問題の内包であるということが頭わになつてくる。そして「帰命相品」以下「念仏品」等をも含めて、「不捨苦悩衆生」という人類的な課題が、仏道における最大の問題であることが明らかにされている。しかもその実践は、無相の智慧たる般若波羅蜜をまたずしては、純粹なる廻向として成就することができない。そうでなければ、阿惟越致を無疑の信念として明証することができない。

ここに「易行品」以降の論文が、単に漸々転進の菩薩のための行を表わすものではなく、易行不退の菩薩にとつても、欠かすことのできないものであることを窺い知ることができるのである。即ちこれが『浄土論』に提出される「如実修行相応」の問題であり、『論註』に出されるところの「称名憶念すれども無明なお存して所願を満さざる」現実をどうするのかという問題である。『論註』はこれを信の不純粹性として押えたのである。つまり、易行不退が本当に如来への無疑の信順たるためには、「廻向」という仏道の課題において、分別自力の心の名残りを照出しなければならぬのではないか。帰依三宝さらには称名憶念という方法も、内実に菩提心の厳しい自己批判によって疑が

除去せられないならば、仏の本願の名号に如実に相応することはできないであろう。しかし「除業品」以下に説かれる廻向の問題こそが、懺悔の問題と相照らして、易行によって阿惟越致を獲得しようという信念の基礎に存する大問題であることが拝察されよう。もちろん、『十住論』における廻向は、求道者の仏道への志向に内具する「不捨苦惱衆生」の廻向心の意である。されば『浄土論』の五念門における廻向も、一応は願生する天親の回向心として表わされているのであろう。

しかして、この廻向心の不純粋性が徹底的に批判されていくときに、「易行品」に弥陀の本願が説かれている意味がより判然としてくるのであるというのが、論主の深意なわけではなからうか。初地不退を障げる疑いとは、仏道を求めんとする求道心そのものの中にある。その疑いは、漸々精進の菩薩の自力心の努力を通して、深い内心の疑惑を自覚していくほかない。しかし、初地に不退を確信することができないならば、それ以上の菩薩地が説かれる意味が失なわれる。無限に聞けども尽きせぬ仏法の大海を、本当に安んじて聞き開いていくことができるためには、初歡喜地を得る方法が明らかになることが先決問題ではあろう。しかし方法を問うに先立って、その内面にある疑悔を抉り出

し、その疑惑を超える主体的態度が不可欠である。しかして論主は、易行の説き方にも、十方十仏の称名不退を通して弥陀の本願を説き、「除業品」以降にはまた、廻向心の実践を勧励するのであろう。詮ずるに、廻向が真に自利利他の実現として正廻向たるのは、弥陀の名号による以外にないというのが「易行品」の本意なのであろうが、それを明解に読み取ったのは曇鸞である。五濁の世に不退を求めするためには易行道によるほかない、仏力住持の易行においてのみ、自利利他円満の無上道が開けるものであるとるのが、曇鸞の『十住論』理解である。それによって始めて親鸞は『十住論』を「行巻」に引用して、浄土真宗の第一祖の位置を与えることができたのであるということができよう。

註

① 「発菩提心品」の七因縁とは次の如くである。

一者諸如来	令発菩提心
二見法欲壞	守護故發心
三於衆生中	大悲而發心
四或有菩薩	教發菩提心
五見菩薩行	亦隨而發心
或因布施已	而發菩提心
或見仏身相	歡喜而發心

- 以是七因縁 而發菩提心。(大正藏二六・三五・上・中)
- ② この点については、拙論「易行品開出の意図について」(大谷学報一五二卷三号)においていささか考察した。
- ③ 「易行品」そのものについては、すでに先学によって細部にわたって研究されているので、本論は主にその前後に問題を絞ることとする。
- ④ 大正藏二六・三五・下。
- ⑤ 因みに、東晋・仏跋陀羅譯『華嚴經』十地品において、六地では「無生法忍未得現前」(大正藏九・五五八・中)と云い七地の文には「是菩薩清淨行故得無生法忍」(同・五六二・中)とあって、八地では「是名菩薩得無生法忍入第八地」(同五六四・中)と述べている。羅什訳『十住經』にも対応する場所と同じような語がある。(大正藏一〇・五一四・中、同五一八・下、同五二〇・下、それぞれ参照)。
- ⑥ 大正藏二六・四〇・上。
- ⑦ 『摩訶般若波羅蜜經』往生品(大正藏八・二二六)同じく不退品(三三九・上)参照。
- ⑧ 大正藏二六・四〇・上。
- ⑨ 『十住論』に出される阿惟越致の特徴は、『大般若』往生品・不退品よりも、どういうわけか『小品般若經』阿惟越致相品に似ているように思われる。
- ⑩ 大正藏二六・四〇・下参照。
- ⑪ 『摩訶般若波羅蜜經』往生品には、「菩薩摩訶薩ありて、初めて意を發すとき、六波羅蜜を行じ、菩薩の位に上り、阿惟越致地を得。……阿惟越致地に住

して終に三惡道に墮せず」(大正藏八・二二六・上・下)とあり、不退品には、魔の誘惑があってもそれを越えうるとが語られ、

「何を以ての故に、是れ阿惟越致菩薩摩訶薩なるや。是れ、自相空の法を以て菩薩の位に入りて、無生法忍を得。何を以ての故に無生法忍と名づくるや。是の中に乃至少し許りの法も不可得なり。不可得の故に不作なり。不作の故に無生なり。是れを無生法忍と名づく。」(大正藏八・三四一・中)

とある。

⑫ 大正藏二六・四一・下。

⑬ 『六十華嚴』十地品、大正藏九・五六二・中。『十住經』大正藏一〇・五一八・下。

⑭ 大正藏九・五六三・下、及び一〇・五二〇・上参照。

⑮ 大正藏九・五六五・上。同一〇・五二一・中。

⑯ 阿惟越致と無生法忍の同異とか、その菩薩諸地における意味は、それぞれ經や論によって異っている点があろうと思うが、主題とするところは、求道者の必定の確信なのであろう。(窺基の『阿弥陀經疏』では、不退転に三義をあげ、地前第七住、初地、及び第七地に不退転があるが、第七地で得無生忍すれば第八不動地に入って不退転であるといっている。浄土宗全書五、五四〇参照)。

なお無生法忍と阿惟越致は『中論』では取扱われていないけれども、『智度論』では非常にしばしば取り上げられ、色々な角度から論じられている。すなわちこの二つの概念は般

若系統の教学の提起する求道の課題であるということができよう。

また浄土の三經では、不退転(阿惟越致)と無生忍との間隔はほとんどないようである。一応区別はされているようであるが、得生者や聞名者がともに、不退と無生忍の益に与えるように語られているのである。なおこの点に関して『易行品講纂』では大凡『十住論』の上では、無生法忍は、不退の異名であると押え、初地以上にこれが与えられるものであるとしている。(真宗全書所収、二七七頁ほか)。

⑬ この經に相当するものとしては『宝月童子問法經』(宋・施護訳、大正藏一四・一〇八下—一〇八上)が現存するが、翻訳年代もくだるし、經の分量も少部で、論主の引いた經との関係は不明である。内容からいうと、この『宝月童子所問經』阿惟越致品の別訳されたものようである。

⑭ この仏と阿弥陀仏との同異については、異説があるが、引用された『宝月童子問法經』の当相を見るなら異仏であると見る方が自然であろう。ここでは東方善徳仏は「成仏已来過六十億劫」とあり、また「宝月、もし善男子善女人この仏名を聞きて能く信受すれば阿耨多羅三藐三菩提を退せず。余の九仏の事みな亦かくのごとし」(大正藏二六・四一・下)とあり、また無量明仏について、「西方この無量無辺恒河沙等の仏土を去りて世界あり。善と名づく。仏を無量明と号す」とある。一方『無量壽經』『阿弥陀經』等では、阿弥陀仏は「成仏已来凡歷十劫」「此去十方億刹」といわれている。それに、「弥陀章」の初頭に、十仏の聞名不退に対して、「さ

らに余の仏菩薩の名」による不退があるかという問いを出し、その答として阿弥陀の名が出ているということ、上記のことなどから異仏と考える方が自然である。しかし親鸞は「行巻」に「西無量明仏」の釈を引用していて、無量明仏を阿弥陀の意を顯わすものと考えたようである。

⑮ 大正藏二六・四二・下。

⑯ 大正藏二六・四三・上。この文について親鸞は、第十七願の意によって、阿弥陀の名が出るところに、諸仏は「諸仏稱讚」の仕事に与るものであるとし、「行巻」に引用するに当たって、「是諸仏世尊現在十方清淨世界皆稱_レ名_レ憶_レ念_レ阿弥陀仏本願_レ如是……」と訓んでいる。

⑰ 大正藏二六・四三・下。

⑱ 同四五・上。

⑳ 同右。

㉑ 「分別功德品」では、先ず廻向を重んじて、さらに懺悔がその徳よりもすぐれることがいわれている。(大正藏二六・四八・上—中参照。)

㉒ 聖全一・四三。

㉓ この文の意を親鸞は、「仏智うたがふつみふかし この心おもひしるならば くゆるところをむねとして 仏智の不思議をたのむべし」(正像末和讃)といっている。

㉔ 大正藏二六・四五・中。

㉕ 同四五・下。

㉖ 親鸞聖人全集一・二八四。

㉗ 聖全一・六八〇。

③① この和讃はいうまでもなく「真心徹到」の語に全比重がかかっている。徹到せる真心にのみ真の懺悔が具せられることが感じられるのであって、疑惑心のままで如何に懺悔をしようとしても却って「外賢内愚」の痛みが深まるのみである。

③② 『往生礼讃』（聖全一・七〇七）。

③③ 大正蔵二六・四六・中。

③④ 論には、「大品経中」「般若波羅蜜随喜廻向品中」「般若

波羅蜜廻向品中」等とあるが、論文の内容からすると羅什訳「金剛般若経」随喜品（大正蔵八・二九七以下）に相当するかと思われる。

③⑤ 大正蔵二六・四七・上。

③⑥ 五戒品（大正蔵二六・五六・中）。

③⑦ 大正蔵二六・五四・下。

（本学専任講師 真宗字）